



#20

星に願いを

著：藍澤たすく

イラスト：かもめ遊羽



「流れ星だ……」

三國陶矢が呟いた瞬間、漆黒の夜空にまた幾筋もの白い光条が刻まれた。

「そういえば今日はなんとか流星群がよく見えるとかニュースで言ってたっけ……」

陶矢は天窓の外の夜空から目を離し、PCの画面に視線を戻した。

それが真っ暗な彼の部屋の中で唯一の光源だった。

陶矢が高校に行かなくなってからもう半年が経つ。

彼の生活の99%はこのPCの前で過ぎていった。

「あったあった。えーと、ベルセウス流星群は年間三大流星群のひとつと言われ、周期は133年の……わっ!」

陶矢はのけぞった。

それもそのはず、ディスプレイに突然新しいウインドウが開き、そこに女の子の顔がアップで映し出されたからだ。

「あれ? 黒須先生? やだ、黒須先生じゃない? どうしよう……」

女の子は画面の向こうで慌てて何やら操作しているようだが、画面が切り替わる気配はない。「もしかして……間違い電話……っていうか、間違いチャット……?」

陶矢は昨日何の気なしに「CN900」というコミュニケーションツールをインストールしたことを思い出した。

それが割り込みで新規の接続を報せてきたらしい、と気づいた陶矢はおずおずと画面の向こうの女の子に喋りかけた。

「あの……一番上のメニューバーの『接続』から相手のIDを選べるから、そこをクリックしたらどうかな?」

「え? ああ、本当、『黒須先生』あった!」

ぱっと笑顔を咲かせた彼女は、しかし次の瞬間赤くなって、もじもじと陶矢を見つめた。

「あの……ごめんなさい……あたし、機械とか苦手で……昨日黒須先生に設定してもらって、ここを押すだけって聞いてたんだけど……それも間違えちゃったみたい……ごめんなさい」

「う、ううん、別に大丈夫だよ。気にしないで」

「本当にごめんなさいね」

「うん、いいよいいよ」

やがてウインドウは暗転し「OFFLINE」の文字の黄色い点滅だけが残った。

(可愛い子だったなあ……)

陶矢はほう、とため息をついた。

ふわふわの栗色の髪と造作の整った目鼻立ち。黒目がちで綺麗な瞳はまるで西洋人形のようだった。透けるように白い肌、というのはああいう娘のことをいうのだろうか……。

……そういえば人と話したのは何ヶ月ぶりだろうか。

陶矢はもう母親とさえ会話を交わさなくなっていた。音もなく部屋のドアの外に置かれる食事をそつと食べ、それをまた外に戻すことだけが、唯一の母とのコミュニケーションになっていた。

（ずーっと、このままなんだろうか……）

陶矢は天窓を仰いでため息をついた。この半年、いったい何度同じため息をついたことだろう。

学校には自分の居場所がなかった。それだけははっきりと判った。

だがこのPCの前が自分の居場所かというところでも違う気がした。

このままここでこうして時間を浪費するだけで、僕の人生は終わっていくんだらうか……。

陶矢は自分がどうするべきか、まったく判らなくなっていた。そもそもそんな自分が「生きている意味」なんてあるのだろうか、とさえ思っていた。

これもまたこの半年、数え切れないほど自問自答した事だった。

「あつ……さっきの……」

突然、PCの画面に先ほどの女の子が映った。

その瞬間、陶矢は無意識のうちに『接続履歴』からその女の子のIDを選択してクリックして

いた自分に気づき、狼狽えた。

「う、うん、こんにち……じゃない、こんばんは……あの、あれから上手く黒須……先生？
つながつたのかなって思ってた……」

「わあ、ありがとう！ わざわざ心配して連絡くれたの？ うれしいー！ うん、先生とは
ちゃんとながつたよー！」

画面の向こうの彼女は何の邪気もない顔で花咲くような笑顔を見せた。

それを見て陶矢はなんだか嬉しいような、恥ずかしいような気持ちになって思わずちよつと視線をそらしてしまう。

「あたし、『ありす』って言うの。あなたは？」

「僕は、とうや。三國陶矢……」

「とうや、とーや……かっこいい名前だね」

「そ、そうかな……」

「うん、かっこいいよ！」

子供のような笑顔で話しかけてくるありすに、陶矢はなんだかくすぐったいような、ほっとしたような……この半年間一度も味わったことのないような……幸せな気持ちを感じた。

「じゃ、またね」

「うん、じゃあまた」

ひとしきり彼女との他愛のない会話を終えた陶矢は、接続を切り、再び天窓を見上げた。

そこにはまだペルセウス流星群の流れ星があった。

（またありすと会えますように、またありすと会えますように、またありすと会えますように……）

陶矢は心の中で、そう真剣に繰り返し返した。

煌めく流れ星は、少しでも自分の気持ちを決めてくれたような気がした。

「そしたら大盛り注文したわけでもないのにすごい量のラーメンが出てきちゃってさ。驚いたよ」

「へえ、そんなお店あるんだ」

「全然食べきれなくてふうふう言いながら周り見てたらみんなそれをべろりと完食してるんだよ。びっくりした」

「え、すごい」

最初の接続から1ヶ月。

今ではこうして日に1回、陶矢とありすは長電話……長チャット？……することが習慣になっていた。

陶矢としては、本当は1日に何度でも接続コネクタクトしたかったのだが、そうすると引きこもっている自分の現状を知られてしまいそうなので、なんとか1回だけで我慢していた。

「とーやは学校で部活入っているの？」

「うん、陸上部やってる」

とっさにウソが口を衝いて出た。

陶矢が陸上部に所属していたのは中学校の時の話で、高校に入ってからからは100%帰宅部だったからだ。しかも今は帰宅部ですらない自宅警備員だ。

「とーや、足、速いの？」

「そうでもないけど……800メートルで県大会に出たことはあるよ」

それは本のだが、これも中学の時の話だった。

「そう、うらやましいなあ……」

「え？」

ありすが不意に遠い目をして小さなため息をついた。

いつも溢あふれんばかりの笑顔を浮かべている彼女にはめずらしいことだった。

「あだし、体弱いから、外に全然出れなくて……そうやって思いっきりスポーツできるのってうらやましいなって……」

「……」

突然の告白に陶矢は言葉を失った。

「黒須先生はもうちょっと良くなれば、外にも出れるって言うけど……もうずっと外、出てないんだ……」

「そう……」

二人の間に沈黙が訪れた。

陶矢は何か彼女にかける言葉を、と考えたが、思い浮かぶ台詞はどれもこれもこれもうそくさいものばかりだった。そもそもこんな自分が、いったい彼女にどんな言葉をかけられるというのだろうか……。

「あ、ご、ごめんね！　なんだか暗い話しちゃって！」

「え、あ、いや、ううん、大丈夫。全然、大丈夫……」

「あたし、星が好きなんだ！」

「え？」

画面のありすはまたいつもの明るさと快活さを取り戻していた。

「とーやのところは今、お昼なのかな？　あたしの方は今ちようど夜で、満天の星がいっぱいなんだよ。ほら」

PCの画面に、ありすの部屋の外の夜空が映る。どうやら彼女がカメラを動かしたようだ。

そこには本当に宝石箱をひっくり返したような様々な色の星たちが、思い思いに煌めいてた。

陶矢の頭上に広がる夜空より、2倍も3倍も星があった。

(郊外の……空気の澄んだ……綺麗な場所……療養に、最適な……)

陶矢の脳裏に切れ切れに、そうした単語が浮かんで消える。

「とーや、これって写真送れるの？」

「え？　ああ、うん。ファイルメニューから添付、送信で……」

「あ、ほんとだ。えい！」

「わあ……」

ありすから送られてきた写真ファイルを開いた陶矢は思わず感嘆の吐息を洩らした。星空だ。それも圧倒的な。

闇の部分よりも光り輝く星の方が多いぐらい、夜空にびっしりと星が敷き詰められている。それはまるで星々が織り成す美しい絨毯のようだった。

「お父さんがあたしのために、天文台の人からもらってきてくれたんだ。なんだっけ、宇宙に浮かんでる大きな望遠鏡のやつ……それで撮ってもらった写真なの」

「綺麗だね……」

凡庸な感想を口にして、陶矢はあまりの自分の発言の陳腐さに我ながらイヤになった。

「そうでしょ、綺麗でしょ。こんなにいっぱい光……あたし、よく判らないけど、この中に

は100年前の星もあれば、100億年前の星もあるんだって。それってなんだか不思議だよね」
 それなら陶矢も聞いたことがある。光の速度はおよそ毎秒30万キロメートル。遠くにある星の光ほど地球に到達するまで時間がかかるのだ。
 「そうして考えてみると、いろいろ安心するの。なんて言うんだろう、これに比べれば人間なんてちっぽけなものなんだな、って……何も心配することないんだなって……」

「うん……」

「ごめんね、今日は変な話ばかりしちゃったね」

「そんなことないよ」

「ありがとう……。じゃあ、また明日ね」

「うん、また明日」

OFFLINEの黄色い文字が点滅する。

陶矢はありすにもらった写真をPCの壁紙に設定してみた。

「ちっぽけかあ……」

壁紙の星々はただ静寂の輝きを保ったままだった。



1年ぶりに陶矢の父が帰ってきた。

「調子はどうだ？」

「別に、どうも……」

そんなやりとりをしたきり、二人は向かい合ったまま、黙って座っていた。

外国での仕事が多い陶矢の父「恭二」は、陶矢が小さい頃から1〜2年に一度しか帰ってこなかった。だから陶矢にとって恭二は「父」というよりは「たまに来るおじさん」という位置づけの人間だった。

「晴美も——母さんも、心配してるぞ」

「わかってるよ。……わかってる……でも、わかんないんだ」

「そうか……」

再び、沈黙。

「俺と一緒に、来るか？」

「え？」

「どうせこのままここに引きこもってる予定しかないだろう？ 世界は広い。若いうちにそれを見ておくのもいいだろう。俺もちょうど助手が欲しかったところだしな。実は晴美にはもう話してある」

恭二はそう言うのとニヤツと笑った。浅黒い肌には不釣り合いなほどに白い歯が覗く。

「お。ハッブル宇宙望遠鏡の写真か」

応えに窮きつしている陶矢をよそに、恭二はやおら立ち上がるとPCの壁紙を覗き込んだ。

「ハッブル？」

「知らないのか？ 地球の周りをぐるぐる回ってるくそでつかい望遠鏡さ。大気なんかの影響を受けない分、クリアな天体観測ができるってやつだ。……あー、でもこりゃあれだな、写真じゃなくてCGだな」

「CG？ どうして？」

「たとえば、これだ。これはおそらくプロキオンを想定して描かれてるんだろうが、プロキオンがここまで大きな赤色巨星になるには……そうだな、今からざっと10億年はかかるだろうな」

「10億年……」

「それからこのプロキオンとシリウスの位置関係だ。地球から観測すると、この二つの恒星はこの位置には来ない。逆になる」

「そうなの？」

「そうだ。だからこのCGは『10億年先の地球以外の惑星から見た宇宙』をイメージしてるんだろうな。わりと正確に計算して描かれてるっほいけどな」

「地球じゃない星……」

「ん？ どうした、陶矢？」

茫然自失ぼうぜんじしつの状態たいたすで佇たたずむ陶矢に恭二が声をかける。

「まあ、返事はそんなに急がなくてもいい。俺は今回1ヶ月ぐらい滞在するつもりだから、その間にじっくり考えてみるからだ」

そう言うと恭二は腰をあげ、部屋をあとにした。

「10億年……」

陶矢は誰にともなく、そう呟つぶやいた。

そしてこの日から突然、ありすに接続つなぐが出来なくなった。

ID Not Foundの赤い文字がディスプレイの中で静かに点滅を続けている。

ありすと接続つなぐできなくなつてからすでに20日目。

陶矢は幾度となく接続を試みたが、返ってくるのはいつも同じ「ID Not Found」だった。つまりは、ありすがIDを削除した可能性が濃厚濃厚だった。

(どうして急に……)

陶矢はベッドにごろりと転がったため息をついた。

(……ありすはなんぞあの「CG」を「写真」と言っただらう……)
それがこの20日間、陶矢の頭について離れない疑問だった。

陶矢なりにいろいろと調べて、壁紙の写真は恭二の言うとおり、CGの可能性が高いことが判った。

某・質問掲示板では天文オタクの人が丁寧な回答をくれた。それによるとあのCGは恭二が指摘した以外の恒星・星雲の位置関係もとても正確で、よほど精緻な計算・考証を元に描かれた「10億年先の宇宙」であろう、とのことだった。まるで本物のハッブル宇宙望遠鏡で撮影されたかのような精巧なCGだ、という評価だった。

本当にこの写真が10億年先の未来から送られて来ていなければ、の話だが……。

——ピッ！

PCから聞き慣れた接続音が聞こえた。

「……とーや、いる？」

「ありす!？」

陶矢はベッドから飛び起きてすぐPCにかじりついた。

「どうしたの？ 急に連絡とれなくなったから……心配してたんだよ！」

「ごめんなさい……もう接続するつもりはなかったんだけど……」

「……どうして？」

ありすは躊躇いがちに一度目を伏せた。やがて意を決したように言葉を接ぐ。

「明日あたし、手術するの」

「えっ!？」

「黒須先生は大丈夫って、言ってくださってるけど……あたし、本当は難しいってこと、よく知ってるの……だから多分とーやと話せるのも、今日が最後……」

「そんな……」

「だから、とーやの中には笑ってるあたしの記憶だけを残して……泣き顔なんか見せないで……もう接続しないようにしようって決めてたの……決めてたのに……」

そこまで言っておりすは顔を伏せた。小さな肩が震えている。嗚咽に合わせて震えている。

「どうしても、とーやの声、聞きたくなって……」

顔を上げたありすの両目からはぼろぼろと涙が零れ落ちていた。

「大丈夫だよ！」

「え？」

「きつと、うまくいく！ うまくいくよ！」

何の根拠もない空虚な励みだった。

だがそれでも陶矢は口にはせすにはいられなかった。

「元気になるよ！ ありすは、絶対元気になるよ！ だって、そうじゃなきゃ、そう、じゃな

きや……」

「とーや……」

PCの画面がぼやける。いつの間にか陶矢の両の瞳にも溢れんばかりの涙が溜まっていた。

「ありがとう」

「え？」

「やっぱり最後にとーやと話せて、良かった」

不意に画面の中のあるすの画像にノイズが走った。

涙を拭う彼女の顔に幾筋もの白い光のラインが重なる。

それはなぜか、以前見たベルセウス流星群を陶矢に連想させた。

「#■#のは\$*念だけど……%#とーやに会えて本#★●&%良か&||\$#……」

続いて彼女の音声にも雑音が混じり始め、聞き取りづらくなってくる。

「あります？ あります!？」

「#■#いつか◎%%#★●&%好||\$#きつと……★●&」

暗転。

続いて点滅表示されるOFFLINEの黄色い文字。

「あります!? ありますー!？」

陶矢は必死に「接続」をクリックしたが、もはや「CONNECT」が応答することはなかった。

陶矢は呆然と椅子に身を沈め、虚ろな瞳で宙を見上げた。
空には流れ星。
星は陶矢の気持ちを判ってはくれなかった。



「三國博士。まもなく出航のお時間です」

「わかった、すぐ行くよ」

白衣に身を包んだ三國陶矢はもう一度深く椅子に身を沈めると、強化ガラスで出来た半球状のドームから夜空を見上げた。

あれから十年。

陶矢は死にもものぐるいで勉強した。物理学を、数学を、天文学を、機械工学を、ありとあらゆる学問を。

そしてついに確立したのだ。時間と空間を超えて旅するための基礎理論を。

今日は、陶矢が指揮をして建造された亜空間航行船、クイーンズ・ラスト・リゾート号の初の試験航行が行われる日なのだ。

陶矢はポケットから1枚の写真を取り出した。それはありすに送ってもらったあの写真だっ

た。

この10年、どれだけこの写真を見て、考えて、そして思いを巡めぐらせてきたことか……。陶矢は再び夜空を見上げた。そこには一筋の流れ星。そう、あの時と同じように。

(まだまだスタート地点に立ったばかりだけど……)

陶矢はそっと写真をポケットにしまった。

あります。

僕は必ず行ってみせるよ。

君のいる星へ。

君のいる未来へ。

いつか、必ず——。

おしまい